

地蔵説話の〈蘇生譚〉が意図するもの

—『今昔物語集』卷十七を中心として—

好 村 友 江

一、はじめに

地蔵説話は、日本の説話集のなかでは『日本霊異記』に初めて登場する。同説話集以降、地蔵説話は『拾遺往生伝』に一話、『今昔物語集』に三十二話と続く。そこで、『日本霊異記』以降の説話集に収められた、地蔵説話の数と蘇生譚の数を作品の年代順に整理し、その概要を整理したものが、付表の一覧表である。ただし、今回は紙幅の関係から一四九一年の『地蔵菩薩靈驗絵詞』までを対象とした。この表から、『今昔物語集』が説話集の中では最も早い時期に、三十二話もの地蔵説話を収めていたことが分かる。よって、『今昔物語集』の地蔵説話に焦点を当て、同説話集以降の説話集に収められた地蔵説話との関係を考察することで、地蔵説話の一流を明らかにすることができよう。本稿では、その一段階として、地蔵説話の「ご利益」の核をなす〈蘇生譚〉に焦点を絞り、その意図するものを明らかにしたい。そして、同説話集以降の説話集に収められた蘇生譚との関係にも触れたい。

地蔵説話の〈蘇生譚〉が意図するもの—『今昔物語集』卷十七を中心として—

二、『今昔物語集』の地蔵説話について

『今昔物語集』の三十二話は、卷第十七ノ第一から卷第十七ノ第三十二までに収められている。この三十二話の地蔵説話の構造については、佐原作美氏が「地蔵信仰説話の構造」(『駒澤短大國文』第13号 昭58・3)でその特色を詳しく論じている。

佐原氏の論は各話を外観して、A主人公である帰依者の提示があり、Bその者の具体的な所業にもとづく地蔵の利益の実例が述べられ、最後に、C編者による説話標語をもって一話が終結するという展開になっていると指摘した上で、説話間により個性性的に見られる、主人公とその所業、あるいは地蔵とその利益といったA Bの項を中心にみていくというものである。その時、筆者の整理するところと若干の相違があるので、ここでは佐原作美氏の論を紹介するとともに、相違点あるいは不十分と思われる次の二点について特に取り上げ、『今昔物語集』の地蔵説話のまとめとしたい。

第一点は、地蔵の像形についてである。佐原氏は地蔵の像形を、「年令」「形容」「同伴者」「手印及び所持するもの」の四項目から

考察している。概略を次にまとめてみる。

年 令 地蔵は年令や体軀の上から見て、十三、四歳ないし十八歳程度として認識され、その像形を比丘僧として想念されていたといえる。

形 容 端正端嚴にして美麗なる尊像というイメージをもつて見られていた。

随 伴 者 地蔵と諸仏とが複合併置されている例も見られるが、人前にその姿を現わす時は地蔵は単独で現われるのがほとんどである。

手印及び所持

像形の具体的記述のあるのはわずか六例といふことは、『今昔』の編者にとって、経軌にもと

づいた像形の正確な図像的説明を施すよりも、より实际的で現実的な諸利益を説くことの方に意義を認めていたことによるものと思われる。

随伴者については規定が曖昧なので、地蔵と共に出てくるものを「随伴者」「諸々の菩薩」「地蔵」の三つに分類したい。先ず、随伴者と現われるのは、1「嬬」と18「形チ美麗ナル童子一人」の二例のみである。そして、諸々の菩薩と一緒に現われるのが、5「五十余体ノ仏菩薩ノ像」、6「毘沙門天」、17「五六人ノ小僧・三十余人ノ小僧左右に列セリ」の三例。他の地蔵と一緒に現われるのが、12「二十体ノ地蔵」、23「六地蔵」の二例である。つまり、三十二話中二十五話は単独で現われるということである。

また、四項目では地蔵の像形を考える上で不十分と思われるので、次の「地蔵が人々の眼前に姿を現わす時の姿そのもの」と、「地蔵

が現われる場所」の二項目を加えたい。

姿	場所	
	現	夢
小さき僧	25例	3例
地蔵菩薩	3例	2例
牛飼う童	1例	2例
僧	1例	23例
龜	1例	24例
その他	3例	25例
冥途	12例	16例
現世	7例	18例
地獄	2例	20例
		21例
		22例
		23例
		24例
		25例
		26例
		27例
		28例
		29例
		30例
		31例
		32例

地蔵が人々の眼前に姿を現わす時の姿は、〈小さき僧〉が二十五例と最も多い。これは、現代において見ることのできる、道端に佇む小さな石地蔵の姿を彷彿させよう。そして、地蔵が現われる場所は、冥途が十二例と最も多くなっているのは、蘇生説話の多さから見ると当然の結果であろう。それに比べて夢中が十一例と冥途と肩を並べているのは、当時の神仏の出現の有り方を窺わせるものとして興味深い。また、地獄の二例は、たとえ冥途で救うことができなかつたとしても、地蔵は救いの手をさしのべてくれるというものであり、地蔵の慈悲の深さを暗示している。

第二点は、利益についてである。佐原氏と筆者の考えている分類とは少し違いがあるので筆者の分類をここに挙げる。さらに、生前の行為として、善いことをしていたのか、悪いことをしていたのか、

あるいは、その両方かを「善」「悪」「両」で示した。

巻数	利益	行為	巻数	利益	行為
1	値遇	善	17	蘇生・往生	善
2	往生	両	18	蘇生	善
3	救命	悪	19	蘇生	善
4	救命	悪	20	蘇生・(引導)	善
5	知らせる		21	蘇生	悪
6	知らせる		22	蘇生・往生	善
7	富貴	善	23	蘇生・往生	善
8	往生	善	24	蘇生	両
9	救命	善	25	蘇生	善
10	往生・救命	善	26	蘇生(二人)	善
11	戒められる	悪	27	地獄抜苦	両
12	褒められる	善	28	蘇生	両
13	救命	善	29	蘇生・往生	善
14	往生	善	30	往生	善
15	富貴	善	31	地獄抜苦・転生	両
16	往生	善	32	褒められる	善

利益を後世利益と現世利益に分類すると、後世利益が十三例で現世利益が二十例となる。その内訳は次の如くである。後世利益は「往生」十例(2 8 10 14 16 17 22 23 29 30)、「地獄抜苦」二例(27 31)、「転

地蔵説話の(蘇生譚)が意図するもの——『今昔物語集』巻十七を中心として——

生」一例(31)となる。現世利益は「蘇生」十二例(17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 28 29)、「救命」五例(3 4 9 10 13)、「富貴」二例(7 15)、「値遇」一例(1)となる。その他、五例(5 6 11 12 32)。よって、現世利益の「蘇生」が最も多いことが分かる。

生前の行為は、三十二話中二十一話が(善)であり、全体の約70%を占める。そして、善と悪の(両)が五話、(悪)が四話、明らかに悪いものが二話である。善い行為によって利益を得るのは当然の報いと言えるので、(善)と(両)を除いた(悪)の四話については注目しておきたい。

三、『今昔物語集』に見る地蔵説話の蘇生譚について

『今昔物語集』の地蔵説話に見る蘇生譚は、十二話である。因みに、巻第一六の観音説話は四十話あるが、その中、蘇生譚は一話(36)のみであり、ここにも地蔵説話の特色、つまり地蔵に課せられた役割を窺うことができる。

基本的な話型は、生前に地蔵を信奉していた人、あるいははしていなかった人が、身に病を受け忽に亡くなる。ところが、しばらくして蘇生する。その人は、冥途で地蔵が現われて救ってくれたことを皆に語る。それを聞いた人達が地蔵を信仰するという型である。

そこで、この十二話を①冥途に行くことになった原因、②靈験を受ける人物(以下、「受者」と略記する。)の現世での行為、③受者の冥途での行為の三点から詳細に見てみよう(引用は岩波の古典文学大系に拠る)。

17 ① 流転生死ノ業縁 (中風)

② 常ニ特斉シテ毎日ノ晨朝ニ、地藏菩薩ノ宝号一百八反唱フ。

③ 音ヲ挙テ大キニ叫テ云ク『我レハ此レ、淨行ニシテ眞実ノ行者也、三業六情ニ於テ犯ス所无シ。』… 『諸佛菩薩ノ誓願ハ本ヨリ虚妄无シ。我レ若シ、此ノ言、遂ニ不叶ズハ、諸佛菩薩ノ眞実不虛ノ誠ノ言、皆、虎妄ノ説ト可成シ』ト。

18 ① 中天ノ業縁 (病)

② 諸ノ山ヲ廻リ海ヲ渡テ、難行苦行ス。

③ 身ノ毛堅チ魂迷テ、更ニ東西ヲ忘レタリ。

〔小僧が地藏菩薩であることを教えられて〕驚キ恐レテ、礼拝恭敬ス。

19 ① (地藏ガ) 他行ノ間ニ (病)

② 年十二歳許也ケル時ニ、… 戯レニ自ラ一ノ僧形ヲ刻テ、此レ、「地藏菩薩」ト名付テ、… 其ノ僧ヲ敬テ供養スル…

③ 心迷ヒ肝碎テ、思ユル事无シ。但シ、纔ニ心有テ自ラ思ハク、『我レハ死ヌル也ケリ』。而ルニ、生タリツル時、法花経ヲ読誦シ、観音・地藏ニ懃ニ仕リツ、『必ズ此ノ度ノ我レヲ助ケ給ヘ』ト念ジテ、

20 ① 前世ノ業縁 (病)

② 三尺ノ緑色ノ地藏菩薩ノ像一軀ヲ造テ、其ノ寺ノ内ニ安置シ奉テ、日夜ニ恭敬シ奉テ、怠ル事无シ。

③ 東西ヲ忘レテ更ニ思ユル事无シ。
小僧ノ前ニ進ミ至テ、地ニ跪ツイテ申テ云ク『我レ、不計ザル外ニ此ノ所ニ被召タリ。願クハ、地藏菩薩、大悲ノ誓願ヲ

以テ、我ヲ助ケ免シ給ヘ。大士ノ利益方便ニ非ズハ、何カ此ノ所ヲ遁レテ故郷ニ返ル事ヲ得ム』ト。

21 ① 罪有テ (病)

② 公ケニ仕ヘ私ヲ願テ有ル

〔地藏ガ告げる〕常ニ女ニ耽テ多ノ罪根ヲ殖タリ。… 生タリシ間、全ク我ヲ不敬ス。

③ 此小僧ニ向テ、地ニ跪テ涙流シテ申テ申ク、『我レ、不慮ザル外ニ此ノ所ニ被召タリ。願クハ、地藏、大悲ノ誓ヲ以テ、我ヲ助ケテ免ス謀ヲ廻シ給ヘ』ト。〔地藏に汝の事は知らぬと言われる〕弥ヨ悔ヒ悲テ、重ネテ小僧ニ申テ云ク、『尚、我ヲ慈ビ給テ、助ケ救テ免シ給ヘ。我レ、本国ニ返タラバ、財を棄テ、三寶ニ奉仕シ、偏ニ地藏菩薩ヲ帰依シ奉ラム』ト。

22 ① 罪ミ有テ (忽ニ)

② 心直クシテ身ノ弁ヘ賢カリケリ。公・私ニ被仕テ家豊也ケリ、亦、懃ニ人ヲ慈ブ心有テ、生類ヲ殺ス事无シ。凡ソ、道心深シテ、毎月ノ廿四ニハ、必、持斎精進ニシテ、佛事ヲ営テ、殊ニ地藏菩薩ヲ念ジ奉ケリ。

③ 心迷ヒ肝碎ケテ、音ヲ擧テ泣キ悲ト云ヘドモ、更ニ其ノ益无シ。

大キニ喜テ、小僧ノ御前ニ至テ、掌ヲ合セテ地ニ跪テ、泣々ク申シテ云ク、『宿因ノ催ス所ニテ、幸ニ大師ニ値ヒ奉レリ。今、此レ引撰ヲ可蒙キ時也。願ハ、地藏菩薩、我レヲ助ケ給テ、早く本ノ閻浮ニ返シ給ヘ』ト。

23 ① (病)

②少年ノ時ヨリ三寶ニ帰依スル志有ケリ。其ノ中ニモ殊ニ地藏菩薩ニ仕テ、日夜ニ念ジ奉テ、起居ニ付テモ敢テ怠ル事无カリケリ。

③廣キ野ニ出デ、道ニ迷テ、東西ヲ失ヒテ、涙ヲ流シテ泣キ悲ム

24 ① (病)

②心猛クシテ殺生ヲ以テ業トス、更ニ聊ニモ善根ヲ造ル事无シ。鹿ノ迹ルニ随テ馬ヲ馳セテ追フ程ニ、一ノ寺の有ケル前ヲ馳セ渡ケル時ニ、眸ニ寺ノ内見遣タルニ、地藏菩薩立給ヘリ。此ヲ見テ、聊ニ敬フ心ヲ發シテ、左ノ手ヲ以テ笠ヲ脱テ、馳セ過ヌ。

25 ① (病)

②目暗レ心迷テ悲キ事无限シ。：『我レ、一生ノ間、罪業ヲノミ造テ、善根ヲバ不修ザリキ。然レバ、罪、敢テ可通キ方无カラム。悲シキ態カナト』思ヒ歎キ居タル程ニ、

26 ① (病)

②亀ヲ買取テ：海ニ放チ入レツ。
③心ノ内ニ恐ヂ怖レ思フ事无限シ。
28 ①身ニ罪有リ。(病)

②月ノ廿四日ニ六波羅密ノ地藏講ニ參テ、聴聞シケルニ、：衣ヲ脱テ佛師ニ与ヘテ、一磔手半ノ地藏ヲ造リ奉テケリ。未ダ、

不開眼ザリケル

(地藏が告げる)「ハ男姪ノ罪也。二ハ講ニ參テ法ヲ聞シ間、不聞畢ズシテ出テ去レル罪也。」

③特になし

29 ① (病)

②形ヲ美麗ニシテ心柔和ケリ。父母有テ、度々夫ヲ合セムトスト云ヘドモ、全ク此レヲ不好ズシテ、寡ニシテ年ヲ送ル。
③肝碎ケ心迷テ難堪キ事无限シ。

掌ヲ合テ小僧ニ向テ、地ニ跪テ泣々ク申シテ云ク、『南无帰命頂礼地藏菩薩』ト両三度。

①の冥途に行くことになった原因は、十二話中四話(20 21 22 28)が受者自身の「罪」によるものや、十二話中二話(17 18)が「流転生死ノ業縁」や「中天ノ業縁」といった因果応報によるものである。従つて、現世での死の原因としては、具体的な病名を示さず、17の「中風」を除いた十話が単なる「病」である。22ではその「病」すらなく、「忽ニ亡クなつてしまふ。また、興味深いものとして、19の「他行ノ間ニ」がある。いつもは受者のことを守っているのに、たまたま地藏が他に行っている間に亡くなるということは、地藏の多忙さを窺わせるものであると同時に笑いをさそふ。

②の受者の現世での行為は、一でも触れたように21のみが(悪)である。「常ニ女ニ耽テ」いた罪と「全ク我(地藏)ヲ不敬ス」の罪により、地藏にも汝のことは知らぬと言われる。それでも救われるのは、現世での罪を悔いて「本国ニ返タラバ、財ヲ棄テ、三寶ニ奉仕シ、偏ニ地藏菩薩ヲ帰依シ奉ラム」と誓つたからである。受者

の「弥ヨ悔ヒ悲テ」には、自身の逃れようのない罪をつきつけられた悲しみと同時に、それでも何とかして救われようとする必死の形相が想像できよう。それでは、何がそれほど受者を必死にさせるのか。それは、③の18 19 22 24 26 29の冒頭に記した「身ノ毛堅テ魂迷テ」「心迷ヒ肝碎テ」「目暗レ心迷テ」「心の内ニ恐テ怖レ思フ事无限シ」等の表現から窺えるように、まさに地獄へ墮ちることへの恐怖にほかならない。そのような、言わば極限状態の時に示す受者達の行為にこそ、人間本来の姿を読み取れるのではないだろうか。そこで、

③の冥途での受者の行為についての考察を試みよう。

まず、冥途で地蔵に我身を救ってくれるように自ら地蔵の前に願ひ出るのが四話(20 21 22 29)、念じるのが一話(19)、訴えるものが一話(17)。地蔵を見て、ただ驚き恐れて礼拝恭敬するものが一話(18)。生前に犯した罪を思い、ただ歎いているものが三話(23 24 26)。その他、二話(25 28)は受者が地蔵に何らかの働きもしないうちに救われるものである。この中で、特に注目したいのは、17である。

17は諸佛菩薩の誓願を盾に取り、脅迫的な言辞をなす者である。彼は、短命を予言されて後、寺を棄て永く笠置の窟で苦行を勤行をしていた。それ故に自分のことを「浄行ニシテ真実ノ行者也」と言い切るのである。そして救ってくれなければ「諸佛菩薩ノ真実不虛ノ誠ノ言、皆、虚妄ノ説ト可成シ」と言って、救済を必死に求め、理詰めで迫るのである。このような特殊な生真面目な人間もいるのである。

十二例のうちただ一例(18)のみが地蔵を見て「驚キ恐レテ、礼拝恭敬ス。」という態度を示す。この受者は日頃から修験を好んで

難行苦行をしていた人物であり、具体的な罪は記されていない。つまり、この受者の態度は、潜在的な罪の意識の現われと解釈しているのではないだろうか。本来ならば神佛の前に立つ人間は、総ての人が己の罪の深さに、この受者と同じ態度を取らざるを得ないのではないだろうか。また、24の受者は生前の罪業の深さを認識している点においては、謙虚さを窺える。20の地蔵に救いを願ひ出る人物も人間のごく自然の様相である。そのような色々な性格、心情、性癖をもつ人間共を、たった一度の地蔵に対する敬い心によつても救おうとすることから、地蔵の慈悲の深さを物語るものである。當時としては、人間のあらゆる場合を殆ど網羅して救済しているのではないかと思う。

それでは、この蘇生譚を基本として、同説話集以降の説話集において現出する特異的な蘇生譚について触れておきたい。

四、八世紀から十五世紀までの蘇生譚について

地蔵説話の蘇生譚は、『日本霊異記』から『地蔵菩薩靈驗絵詞』までの七世紀に渡つて二十八の話型を見ることが出来る。『今昔物語集』は、『宇治拾遺物語』や『元亨釈書』、『地蔵菩薩靈驗絵詞』との同類話がある。特に17ノ24は、『宇治拾遺物語』と『元亨釈書』の二本目に同類話がある。この三本を比較して見ると、地蔵に対して「笠を脱いで一礼して過ぎる」ものと、「笠を脱いでいささか帰依して過ぎる」もの、「地蔵を敬いながら過ぎる」もの、そして「雨に濡れている地蔵に笠を被せる」という、四通りの行為がある。こ

の四通りの行為のみを見るならば、最初は笠を脱いで一礼して過ぎたり、敬いながら過ぎていたものが、雨に濡れている地蔵に笠を被せる。これは、地蔵の慈悲が受者に感応して起った現象と捉えられよう。さらにこの行為は、現代の「かさじぞう」の話に引き継がれていく。

次に特異的な話として、『沙石集』の2ノ6を挙げておきたい。

これは『今昔物語集』で言えば、殺生を業とする点では17ノ24に、地蔵との約束で蘇生するという点では17ノ21と繋がる。しかし、『今昔物語集』との相違は、夢中も含めて三度も冥途に行き、そして蘇生している点である。最初は、人の勤めにより造った地蔵のおかげで、夢中ではあるが冥途から救われる。そこで、殺生を止めるが、いつの間にかまたもとに戻ってしまう。いよいよ絶入した時、地蔵との殺生を止めるという約束で蘇生する。ところが、再び約束を破り、今度病で冥途に行った時は、相手にもされない。結局、受者は地蔵の衣の裾にすがりつくことで三度目の蘇生を果たす。どこか滑稽な受者の姿が想像できる。この話から言えることは、人間がいかに意思の弱いものであるかということであろう。そして、三度も許すことのできる、地蔵の慈悲の深さを物語るものである。

結局、『日本霊異記』から『地蔵菩薩靈驗絵詞』の間に見られる二十八の蘇生譚は、救ってほしいという様々な人間の願望を、地蔵が、深い慈悲をもって拾い上げてくれるというものである。これが、貞享元年（一六八四）の奥書をもつ十四卷本『地蔵菩薩靈驗記』に至ると、地蔵を足蹴にする人物も登場してくるようになる。

五、まとめ

以上、『今昔物語集』の卷十七を中心として地蔵説話の蘇生譚に焦点を当て、その意図するものを探ってきた。その結果、地獄を目前にした受者の行為には、様々な姿を見ることができた。例えば、敬虔である者や、救ってほしいことが当然のこととして、地蔵に向かって脅迫紛いのことをする者、自分の罪を認めた上で、なおかつ地蔵にすがりつく者。一見単純な話型に見えながらも、そこには、人間の救われたいという根源的な欲望が顕著に現われていることが明らかになった。それと同時にその欲望を出来る限り叶えてやろうとする、地蔵の慈悲の深さを繰り返し物語るのが、地蔵説話であることが分かった。

そして『日本霊異記』から『地蔵菩薩靈驗絵詞』の間では、二十八話の蘇生譚を見ることができた。その内容は、地蔵が受者の願いをききとげるといった真面目な関係である。先にも触れたように、十四卷本『地蔵菩薩靈驗記』では百五十三話中、三十九話の蘇生譚が収められ、その内容も豊富である。よって、今後引き続き地蔵説話の一系流を明らかにしていきたい。

付表：地蔵説話の蘇生譚についての一覽表

成立年	作品名	数	巻数	蘇生譚の概要	通	備考
八三二	日本靈異記	1 / 1	下ノ9	藤原広足が亡妻の訴えにより閻羅王の前に呼ばれる。	1	宇治
一一一一	拾遺往生伝	0 / 1	—	東大寺の藏満という僧が短命を予言され、笠置の窟で苦行を勤行。備中国の古老の僧阿清が難行苦行の生活をしていた。	2	元亨
一一二〇	今昔物語集	12 / 32	17ノ17 17ノ18 17ノ19 17ノ20 17ノ21 17ノ22 17ノ23 17ノ24 17ノ25 17ノ26	三井寺の僧浄照が幼少時に戯れに刻み供養した地蔵像に救われる。播磨国の極楽寺の入道僧が冥途にて父重正の引導を知らされる。但馬前司国舉が閻魔の庁で生前の罪を懺悔。地蔵に帰依すると誓う。賀茂の盛孝が閻魔の庁で地蔵の代受苦の願い出により救われる。周防国の玉祖神社の宮司惟高が冥途にて六地藏に救われる。源満中の郎等が鹿を追いながら地蔵像に笠を脱いで一札して過ぎる。因幡国の国隆寺の専当法師が別当僧に代わり地蔵像を造りかけて死ぬ。近江の国の下人が妻の織った布を亀(地蔵の化身)の命と引き換える。冥途で娘の身代わりになろうとする。	3 4 5 6 7 8 9 10 11	元亨 元亨 元亨 元亨 宇治・元亨 宇治
一一三七	後拾遺往生伝	0 / 2	17ノ28	京の女人が地蔵講を聴聞して発心する。地蔵像を造りかけたまま死ぬ。	12	元亨
一一五一	本朝新修往生伝	1 / 2	17ノ29	陸奥国の恵日寺の傍らの尼(平の将門の第三の女子)が独り身のまま病死。蘇生の後、出家して如蔵と言う。	13	
一一七八	宝物集	1 / 4	4	大和国の沙門圓能が六僧(六地藏)に浄土を見せられる。五部大乘経を書写して往生を果たすように告げられる。色紙漉しが一年に一度心ざしはないけれど地蔵講を受ける。	14 15	

成立年	作品名	数	巻数	蘇生譚の概要	通	備考		
一一二六	発心集	0 / 2		<p>多田満仲の郎等が鹿を追いながら地藏に笠を脱ぎいささか帰依する。因幡国の国隆寺の別当に代わって専当法師が地藏像を造りかけて死ぬ。賀能ち院という破戒無慚の僧が時々地藏を敬いながら過ぎる。</p>	9	今昔・元亨		
一一二八	宇治拾遺物語	4 / 6	44		<p>藤原広貴が亡妻の訴えにより閻魔の庁に召される。</p>	10	今昔	
一一三三	教訓抄	0 / 1		<p>長安。念仏を信じない母親が病に倒れる。子である尼が母親に念仏をさせる。母親を見取った後、尼も亡くなる。僧（地藏の化身）から、母親は往生していることを知らされ、蘇生する。</p>	82	1	靈異	
一一五四	古今著聞集	0 / 1			<p>京兆の人で王という人が地獄の門前にて僧（地藏の化身）から苦を逃れる偈を教わる。</p>			83
一一五七	私聚百因縁集	2 / 4	5 / 13	<p>惠心僧都の妹の安養の尼が、後世を助け給へと祈って居眠りした時、地藏の夢を見る。後に往生を遂げる。ところが、修学院の勝算僧正が不動の呪を、惠心僧都が地藏をそれぞれ念じると蘇生する。尼が言うことには不動と地藏が自分の手を引いてくれたということであった。</p>	82	16	沙石・雑談	
一一八二	撰集抄	1 / 2	9	<p>安養の尼が絶入の時、修学院の僧と惠心僧都が寶號を唱え祈念した。惠心僧都の給仕の弟子が頓死した時、不動の慈悲の呪を誦せしめ、僧都は地藏の寶號を唱えた。弟子が言うことには、若き僧が男共に救いを乞うたが駄目であった。すると、びんずらを結った童子二人が白杖をもって男共を追い払って取り返し、若き僧に請け取らせた。</p>	6 / 8	17	18	撰集・雑談
一一八三	沙石集	3 / 9	2 / 5		18			

地藏説話の《蘇生譚》が意図するもの——『今昔物語集』巻十七を中心として——

成立年	作品名	数	巻数	蘇生譚の概要	通	備考
一三〇五	雑談集	2 / 7	6 同右	<p>駿河国富士河のほとりに住む殺生を業とする男が、人の勤めにより小地蔵を一体奉る。夢で鬼に取られた時、地蔵の願い出により救われたので一両月は殺生を止めるがもとに戻る。絶入した時、殺生を止めると約束して蘇生するが、一年後再び殺生をする。次に病で亡くなった時は地蔵に相手にされない。そこで衣の裾に取りつき蘇生し、出家。</p> <p>和州生馬に法相宗の学生で論識房という僧がいた。持齋になり小田を作らせ時料とし、庵室を構えて隠居しながら法華経を読み後世の事に思いをあてていた。他界の後、讃岐房という弟子が室を譲りうける。彼も聊か煩つて息絶えるが、蘇生して言うことには、論識房は召人となっていたが他に苦患はないことを知らされた。また地蔵に導かれる途中、餓鬼(亡母)に呼び止められるが、地蔵に守られた。</p> <p>安養の尼と、かの弟子の僧が、地蔵と不動に助けられる。</p> <p>美ノ国原見郡鶉の郷に居た女人が病死。臨終が快くなかったので二人の親しき僧が神呪を誦すと蘇生。女人が言うことには、青く赤き二人の鬼に手を取られて行くと僧が許しを乞うが許されない。次に頂きのはげている童が来て取り返し、此の僧に渡した。</p> <p>周州玉祖神宮司惟高が六地蔵に救われる。</p> <p>平将門の第三の女(如蔵尼)が独身のまま死ぬが、欲事なしと蘇生。</p> <p>釋常照が幼少時に戯れに刻んだ小比丘像に救われる。</p> <p>備の中州窪屋郡の釋阿清は苦行に耐えていた。</p> <p>東大寺の義蔵の徒の釋蔵満が短命を予言され、笠置窟で苦行をする。</p>	18 18	撰集・沙石
一三三二	元亨釈書	6 / 7	17 18 19 同右 同右	<p>同右</p>	8 13 4 3 2	今昔 今昔 今昔 今昔 今昔

成立年	作品名	数	巻数	蘇生譚の概要	通	備考
一四〇七	三国伝記	2 / 5	同右 5 / 3	役夫賀能が叡山の横川の般苦谷を過ぎる時、破れた堂の中に雨に晒された地蔵像を見る。自分の笠を脱いでその地蔵に被せる。 洛陽の白川に慈覚大師の作った地蔵があった。その地蔵講に貧女が一度加わる。炎魔宮にて一人の僧が代受苦を願ひ出て救つてくれる。その僧に後ろを杖で打たれたと思うと蘇生。杖の跡に都率という文字。 漢言、簡州金水県にいた劉氏侍良が捨ててある杖を拾う。杖の頭に刻んであるものが何の像か不明だが、持つて帰り壁の間にさしはさみ安置して時々自食の一分を供養した。獄門で形甚だ醜鄭なる一人の沙門が救つてくれる。この杖頭の像に刻綵を加え嚴飭すると像はたちまち光を放った。その家に安置して地蔵院と号す。	21	今昔・宇治
一四九一	地蔵菩薩靈驗 絵詞	7 / 18	上ノ2 上ノ3 上ノ5 中ノ3	大唐の長安の都督崔季係が生前地蔵に仕えていたことで蘇生。人間に還る前に地獄を見せてもらい、地蔵を念じることで地獄の苦から救われることを教えられる。 大和国の糺の文時は信心していた。聖徳太子の時、百濟国より渡ってきた宇治橋寺の又蔵にある三尺の地蔵に閻魔王宮から救われる。 後白河法皇の時、女官で奉仕している者が質様であったので、遂に法師と関係を持った。地蔵の熱心な信奉者でもあった。閻魔王はこの女を救うことを拒絶するが、地蔵は自らの左の眼を取り出し許しを乞う。 伊勢国の重慶という僧の子供が、家の前の率兜婆に南無地蔵菩薩と書いて何となく挿んでいた。閻魔王で亡き祖父が嘆願している時、鬼がこの童の足を釘で打ちつけ背に鉗を一射立てて去る。祖父が引放とうとするがで	23 24 25 26	

地蔵説話の「蘇生譚」が意図するもの——『今昔物語集』巻十七を中心として——

成立年	作品名	数	巻数	蘇生譚の概要	通	備考
			中ノ6	きずにいるところ、僧が現われ釘と矢を抜いてくれる。入道が七条桂河の土で造った丈六の地蔵に救助される。お札に地蔵の「自分が居る東の道四五町に、水が流れて、冬にもなると皆が嘆くので道を造りかえてほしい」という願いを、地蔵に貰った錫杖の助けで程もなく造り終える。	27	
			下ノ1	近江国に居た賤しき男が妻の織った布を亀(地蔵の化身)と交換し、逃がしてやる。冥途にいた女人の身代わりとなろうとする。	11	今昔
			下ノ5	糝坂の人宿の地蔵を下部なる男は必ず合掌して拜む。亡くなり、北に向かつて歩いていると、この地蔵が「この道は悪いからもとの方へ返るように」と言われ、玉の円きを賜る。	28	

〔成立年〕…市古貞次編『日本文学年表』桜楓社 昭和五四年版

※『地蔵菩薩靈驗絵詞』『地蔵菩薩靈驗記』は奥書に拠る。

〔数〕…上段が地蔵説話の数、下段がそのうちの蘇生譚の数

〔巻数〕…『日本靈異記』(日本古典文学全集・小学館)

『今昔物語集』(日本古典文学大系・岩波書店)

『本朝新修往生伝』(大日本仏教全書・名著普及会)

『宝物集』(新日本古典文学大系・岩波書店)

『宇治拾遺物語』(日本古典文学大系・岩波書店)

『私聚百因縁集』(大日本仏教全書・名著普及会)

〔撰集抄〕(続群書類従・続群書類従完成会)

〔沙石集』(日本古典文学大系・岩波書店)

〔雑談集』(中世の文学・三弥井書店)

〔元亨釈書』(大正新脩大蔵経)

〔三国伝記』(大日本仏教全集・名著普及会)

『地蔵菩薩靈驗絵詞』(古典文庫一八)

〔通〕…話型の通し番号

〔備考〕…同類話のある作品名(それぞれ略記)